

空



2013・4

SORA 48号

福岡 田代貞枝

山の井は胎の静けさ花青木
待つ人の来ぬ春泥の靴乾く
残照の覆ひ被さる枝垂れ梅
母の忌や読経の空に百千鳥
法要の正座くづるる春火鉢

福岡 あさなが捷

節分の鬼はなかなか逃げ出さず
上り築碁は帰る処なし
花冷えや天井までも弥撒の声
咲き満ちて疲れてゐたる桜かな
御開帳襷の奥まで燻されて

福岡 栗原京子

豆撒きの人に溺れて手を振りて
人波の前へ前へと鬼やらひ
豆を打つ女や拾ふ益荒男や
どの家も豆撒き夜道鬼ばかり
豆撒きの役者退く道空けて待つ

長崎 鳳 蛮 華

ぽつぺんを見れば記憶の音が鳴る
いにしへは姫が神々冬柏
臘梅やすずる歩きの猫の鈴
冬温し島にたゆまぬ機織女
城塁に越冬つばめ見え隠れ

千葉 原 友 子

一筋の川となりゆき卒業歌

堅牢な隙間編み込む蛇籠かな

公魚に丸窓といふ落し穴

一村といふ掌中の春の露

おぼろ夜の油紙もて出刃包む

東京 山 田 正 子

蕾摘むときのためらひ花菜漬

蠟梅の芯に火種のあるごとく

春怒濤弁財天は琵琶を弾く

澄み切つたコンソメスープ春の宴

臍の緒の箱からからと春彼岸

粕屋 長 憲 一

托鉢の僧一列に雪に消ゆ

共に古い話はながし雪のよる

納骨や天より銀杏降りやまず

出初式五色の水を天にむけ

手をかりて石段登る初詣

福岡 樋 口 みのぶ

白梅や譜んずるごと父の文

パンドラの箱開き黄砂押しよする

あたたかや呼べば応ふる鳥のゐて

風船を持ちて母待つ駐在所

普段着のまま花人となりにけり

糸島 小林 朱 夏

自転車で出てゆく巡査燕の巢
ふらここに少し揺らるる胎の子と
姉となり歩き始むる桜草
齒磨きの仕上げは母が金魚玉
その先は大海原ぞ蛇泳ぐ

大阪 青木 朋子

年新た猫に名水分けてやる
二日はや音立て回る洗濯機
みな声を張つて名のれる初句会
卒寿の句米寿の句佳き初句会
柳川やみな泳ぎゐる朝の鴨

大阪 田岡 千章

数へ日や少し手荒に揉み療治
起き抜けの水初夢を手繰り寄す
考へる間合の蜜柑むきにけり
悴む手握れば握り返さるる
添水鳴るまでの静寂や寒椿

東京 古川 夏子

春の雪消えゆく先の潦
てんてんと小暗き梅の蕾かな
滝音は芽吹きの中や観音堂
離れ住む永き月日や梅白し
夕焼けてつらつら椿ほてりけり

東京 今井 春生

懐かしき癖字で来たる年賀状

いいんじゃないが口癖だつたスイトピー

シャボン玉路地の奥へと迷ひ込む

色白の板さん握る針魚かな

春の海地球の鼓動聞いてをり

須惠 苑 実 耶

群れ鴉冬夕焼にをさまれり

予報通り雪の朝に目覚めけり

春みぞれ賢治は何ものにも負けぬ

如月や納戸に古りし三面鏡

猫の子の女系家族に貰はるる

吉井 高倉 恵美子

車椅子行者のごとく進む冬

会ふたびに年を聞く友桃の花

九十の夫は褒められ剪定す

春風や起重機に乗る女たち

桜咲く家なつかしき戻りたし

福岡 吉村 摂 護

リハビリや一字もならぬ年賀状

ページ繰る俳誌重たき炬燵かな

煩惱をそのまま年越蕎麦啜る

壱岐白く丸く沸き立つ春一番

固まりて曲らぬ指や冴返る

福岡 山内 碧

恋ふ人は夢でも無口冬堇

雪道を歩く一通の封書持ち

春風に吹かれぶらぶら手ぶらなり

料峭や奥へ奥へと朱の鳥居

山茶花や家事を分け合ふ夫となり

行橋 安武 晨子

木の葉散りつくし天域展げたる

耶馬溪や冬帝嶺を離れざる

峡深し山河は冬を輝かす

寒禽も詩ふ頼山陽の詩碑

館冷ゆる異国の俑は弓持たず



空作品抄
柴田佐知子抽出

春田打つ父を煙の通りけり

春愁やいつしか鶴を折つてをり

一湾に津あり浦あり鳥の恋

それぞれにこの世の雪を見てゐたり

大地ごと凍てし鉄路を繕へり

張板の立てかけてあり桃の花

なだらかに春待つかたち阿蘇寝釈迦

つひに牛暴れだしたる春祭

父の文母の日記や昭和の日

鷹匠へ戻るほかなき鷹一羽

高倉和子

中田みなみ

荒井千佐代

服部早苗

柴田志津子

だいじみどり

野上 杏

宮井知英

”

松田明子



手のひらを見せて焚火を囲みけり

理不尽な死を賜りし春の潮

仰向けにたふれてゆきぬ鶏合

篋へ音の移りし初霰

涅槃西風アルプスに雲巻きあがる

絵草子に菓子のごぼる雛座敷

山の井は胎の静けさ花青木

御開帳襖の奥まで燻されて

豆を打つ女や拾ふ益荒男や

いにしへは姫が神々冬柏

おぼろ夜の油紙もて出刃包む

臍の緒の箱からからと春彼岸

出初式五色の水を天にむけ

風船を持ちて母待つ駐在所

矢野百合子

吉田 蓓

亀井紀子

戸栗末廣

野畑さゆり

秋 千 晴

田代貞枝

あさなが捷

栗原京子

鳳 蛮 華

原 友 子

山田正子

長 憲 一

樋口みのぶ

自転車を出てゆく巡查燕の巢

年新た猫に名水分けてやる

考へる間合の蜜柑むきにけり

春の雪消えゆく先の潦

いいんじやないが口癖だつたスイトピー

予報通り雪の朝に目覚めけり

会ふたびに年を聞く友桃の花

煩惱をそのまま年越蕎麦啜る

春風に吹かれぶらぶら手ぶらなり

耶馬溪や冬帝嶺を離れざる

野火打ちし棒のしばらく燻れる

水仙や垂直に刺す豊針

田一枚借りて総出のどんどの夜

淡雪が降るとナースに告げらるる

小林朱夏

青木朋子

田岡千章

古川夏子

今井春生

苑実耶

高倉恵美子

吉村摂護

山内碧

安武晨子

原友子

”

松田明子

柴田志津子



如月や柩のやうな治療室

銅鏡に映りし顔や亀鳴けり

ふくろふの横顔鼻を欠いてをり

一月の竹やぶに入る用のあり

蚕小屋の戸口に枯れの及びけり

鷲の爪ふ厚く森を掴みけり

草千里白また白の雪千里

箒目を三段飛びに雀の子

春うらら水脈の拡がる壇の浦

脇差のごとく置きたる遍路杖

梅蕾む枝も赤みを帯びて来し

弁当に雀集まる小春かな

寒夕焼男の子ばかりが遊びゐる

富士山の噴火演習冴返る

宮井知英

矢野百合子

鳳 蛮 華

戸 栗 末 廣

織 田 高 暢

吉 田 葎

白 水 良 子

あさなが捷

亀井紀子

小林朱夏

秋 千 晴

栗原京子

青木朋子

野畑さゆり

しはぶきて鳥居千本揺らぎけり

山眠る老人ひとり道に出て

僧の影うすうす過ぎし春障子

友禅師口にふくみし寒の水

神木の高きにありて鳥の恋

印鑑を新成人の祝ひとす

底冷や山迫り来て暮るる里

ぬかるみに落ちし椿の白さかな

ゆつくりと育てばよろし雛祭

失恋や菝稜草を茹で上げて

返す波龍のごとくや春一番

浦町の景の端なる千大根

臘梅や三味の音する根津の奥

薔薇を挿す寄る年波は考へず

磨き上げし朝の鏡に初雀

田岡千章

長節子

石川叔子

池田華甲

伊東孝子

苑実耶

遠山のり子

山田正子

仲里奈央

古川夏子

井手本恭子

安武晨子

清水量子

桜三奈子

山口弘子



目の合ひし他人に会釈梅の花

風花が唇に触れ昼休み

ふるさとの話に及ぶ花菜漬

八つ当りの的は夫なり雪柳

雪降るや清水一角すぐきられ

白魚の朝日と共に掬はれし

機音のひびいてゐたる雪の村

みづからの光に溺れ冬の海

うづ潮へ演歌を流し出港す

風花や阿蘇かけのぼる牛の群

寒日和生花にふはりリボンかけ

あたたかや食事療法ゆるゆると

海苔舟の出揃つてゐる有明海

いつまでもをみななりけり雛まつり

猫の子にまだ玻璃越しの景ばかり

今井春生

乾 有 杏

酒井みちこ

山内 碧

岸 千 手

田代貞枝

小川 涼

田邊豊子

木村 信

長 憲 一

ふじの茜

川崎よしみ

鶴田 優

中城 奏

神谷耕輔